

日本地質学会

関西支会報

第8期 昭和25年6月

京都府河守附近の中古生層

(1950, 2月25日講演)

中沢圭二

副田 紳夫

舞鶴附近に分布する上部三疊層(難波江層群)と西方夜久野附近に存する上部又中部三疊紀層(日置層、大河子層)の中古地層を調査し、下の地層層が得られた。

motis (Cunorphotis)?
 Gervillia, Myocoincha,
 Volsella, Bellerophon? 等を産し、
 又 Anisic と思はれる "Danulites"
 を含む夜久野の大河子層が岩相より奈良系層と考へ
 られる事から、塔々中下部三疊紀と推定される。
 (3) 河東、何北河層群の下部の礫岩中からは、多
 数の群虫類、海百合及び柱石稀に Yabeina の
 個体を産し、二疊紀の筈があり、河守層の下部は
 二疊紀を溯る可能性がある。

(註記)

例を講義が再び野外調査を行つた結果、かほりの
 変更を余儀なくされた。この結果は又月、東京
 での總會で講演したが、新しい産は次の通りであ
 る。

		河 西 村		河 東 村		物部 志賀郷村	
地 質 層	六種古	緩丘堆積層					
	三					難波江層群 600m+	
	二					頁岩層(N ₃ N ₂) 砂岩層(N ₂)	
置	中	河西層群	公庄 破岩 砂岩 頁岩互層 400m+	河西層群	夜久野 廣畑層群	何北層群	物部志賀郷層群
	下		一屋 砂岩、頁岩の厚 い互層 770m+				
紀	下						
	砂						
地 質 層	河守層群	河守層群		河守層群		舞鶴層群	

新しく判明した主な事項

- (1) 河守層群は主に粘板岩、頁岩よりなり、砂岩礫岩を夾在するが、礫石には所謂休場式のものが有り、Yabeina n. sp. が多く、上部二疊紀と思はれ、塔々舞鶴層群に對比される。
- (2) 河西、河東、何北三層群の時代は化石が未確定の筈ではあるが、公庄層からは豐富に Myophoria, Pseudom-

河東層群は下部が広畑層、上部が夜久野層と二分し、見かけ上連続しているが両者は連続してはるまい。即ち上表とは上下関係が逆になる。又新しく奈良系層から、夜久野層と所連と思はれる "Danulites" を発見し、河守層の大河子層と対比されることは確実である。何北層群の多数の個体から植物根化石を見出し、又その延長から河守層と同産物の Yabeina 細礫岩-砂岩と見出した。

即ち河北戸群は河野戸群に對する階位の尙餘らざり
 然るに戸群の一般なるべきものがある。このように
 して上列の戸群を下表の如く訂正する。尚、北田
 戸群下部中の腐蝕虫は *divided fossil* か
 古生戸が狭小なものであるか不明である。又中
 上部三疊紀戸や特殊な堆積相を示す準錫戸群が帯
 状に分布する後、夕陽地帯性岩盤の間に隔つて分布
 し、又日本列島に珍らしいかまひ接産な準炭溝造
 を示す等は、小規模の指摘するやうに注目して
 原因を追究せねばならぬ。

中三疊紀	河野戸群	北田戸群	河野戸群	北田戸群
			河野戸群	北田戸群
上三疊紀	河野戸群			

とが明らかになりていざ今回の調査の結果、地質
 調査の東部及び中央奥地の地質も略々明らくなり、
 三疊紀戸の分布は可成り広く、東部に更に一向斜構
 造が存在し、白亜紀層は殆ど大地区に分散して西田
 海岸、西北海岸、東北海岸、東海岸、東南海岸、
 中央奥地に露出することが判明した。

第四紀戸は河川下流域の小規模に発達する現在
 層と、殆ど海岸100m以上限として地成層を帯
 く浸透する堅硬小規模を含み、深天質砂よりなる段
 丘堆積層とがある。

大規模としては文成岩が白亜紀層又は三疊紀層
 中に侵入又は近出岩床或は岩脈として脚置地或東
 南部に南北六ヶ所に分散して露出している。

地質構造は概観すれば白亜紀層と三疊紀層の
 ずれも一致せず、白亜紀層は地中中央部に軸を持
 つ南北方向の一大向斜構造を示し、中央南部に最
 上部戸あり、西部部に上部戸分布し、東北部、東
 南部中部戸現れ、東南部に中部及び下部戸が認め
 られる。之に對し三疊紀戸は略南北方向の東面に
 二分の北にオンゴロマナイ、沿岸一向斜構造を示
 すが西面戸に大体共通の局部的小規模と断戸とに
 より構造が複雑化されている。

傾斜は一般に30°以下であるが尾内、治内の
 背斜及び断戸の附近は30°と對し55°に達する
 所があり、東南部の時前、杖苜内等は地戸の擾乱
 甚しく甚だしく杖苜内北の場にては走向略東西傾斜
 南に85°に達する。

白亜紀戸は西幸にては略平行不整合を以て三疊
 紀戸と接し、明らか不整合面を認め得ないが
 東部に於ては明かな不整合面を認め得ないが
 東南部に於ては下部三疊紀戸と欠除し上部三疊紀戸
 と著しい斜交不整合を以て接する。八木氏は本地
 域西部の白亜紀戸を宗谷戸とし、三疊紀戸を池原
 石砂岩戸を基岩として利次古丹戸と名付けしが

宗谷峠附近の地質構造と 岩相 (1930. 3. 25 講義) 江藤俊治

白亜系が岩田層としてその対象となり得るか
 否かの調査再検討の爲め、24年度P.E.A.C.の
 調査事業として赤石、地質調査所、北大、東北大
 大が北海道北部の白亜系各地域を分担調査した
 様子は宗谷峠附近を受荷す。私は夕月下旬より7
 月下旬に至る約2ヶ月間野外調査に従事した。
 此間約40日間、藤田達人が池原西半の野外調査
 に協力し、其の右主として有孔虫に関する研究を
 行つてゐる。

文成は西海岸方面に就いては田上、八木両氏の
 のものが、其の他断片的な古生物に関する記載が
 数頁あるが地域東部の地質に就いては何等の予
 備知識は得られなかつた。

八木氏によつて西海岸に近く、西を露上り、略々
 南北方向の第三紀戸よりなる一向斜構造がある。

私は八木氏の宇谷戸最上部の砂質頁岩層とこの産出化石と岩相とをより第三紀とすることを妥当と認め、本地域の層序と岩相は概略次の通りである。

宇谷山附近の層序と岩相

	(層序区分)	(層厚m)	(岩相)	(模写地)
新第三紀層	泥質頁岩層	{砂礫、粘土	
	砂質頁岩層	0~5	{含堅小円礫深灰質砂	
新第三紀層	利夫古丹累層	350	{黄褐色細粒、多量 凝灰質 砂質頁岩、砂岩互層 最下部=海緑石砂岩 (0~10m) 基衣=含礫アスハ礫アアリ	利夫古丹川下流
	カルガワの澤果層	40~290	{黄褐色細粒砂岩、又ハ砂質頁岩又ハ砂質頁岩 又ハ深灰質細粒砂岩 又ハ暗灰色石灰質シルト岩	利夫古丹北 カルガワの澤
	泉谷果層	200+	{灰色、硬質無層理細粒砂岩	利夫古丹川上流
新白垩紀層	尾南内累層	300	{巧深、暗褐色軟質細粒砂岩 暗灰、砂質頁岩、硬質砂岩、深灰質砂岩 (泥灰質團塊ヲ含ム層アリ)	尾南内
	珙内累層	450	{硬質又ハ軟質砂岩、頁岩、砂質頁岩 シルト岩ノ互層 (泥灰質團塊ヲ含ム層アリ)	珙内東
新白垩紀層	海の澤果層	150	{灰褐色及至暗灰硬質板状砂岩	海内北の端ノ澤
	時前累層	250	{層理発達シタ砂岩、頁岩、シルト岩ノ 礫質互層 灰黒泥岩ヲ扶ム	時前
	クエナイボ累層	150+	{灰黒泥岩(泥灰質團塊ヲ多量含ム)	クエナイボ ¹⁾

背

本地域には特に著しい褶皺もなく亦斜構造も石油貯留に相当なものがない。

本地域内には一般に第三紀層白垩紀層共に化石を多産するがその保存状態は良好とは言えない。特に第三紀層のものは保存不良である。

化石産出状況の概略は次表の通りである。

京谷岬附近化石産状一覽表

層名	化石区分及産状											多産地	
	A	N	C	I	P	G	D	F	E	Pi	D		M
現生層													
飯山堆積層													
利夫古田原層						A	F	A	R	R	(A)	R	利夫古田原
カルガワの層						A	C	A	A	R		R	カルガワの層
京谷系層	R	R	R	R	R								利夫古田原
尾崎内	A		E	C	F	R	R					R	尾崎内
磯内	F			C	F							R	大岬梁海
瀧の澤				A	F				R	F		R	瀧の澤
海内				A	F							R	海内
テナ小木	A			A	F							R	テナ小木

(化石略記号)

- A: 菊石類 N: オーム貝類 C: 單体ナジ I: イノセラムス
 Pi: 弁足貝 G: 腹足類 D: デンタリウム F: 有孔虫
 E: ウニ類 Pi: 植物 D: 注葉類 M: 其他

(産状略記号) A: 空室 C: 普皿 F: 少 R: 多

gefüge からみた絶り川流線 の石英片巻

1950 3. 25 講演

中山 勇

(1) 石英がレンズ状あるいは板状を呈している場合、最大厚部から赤線部にかけて、その配列が変化し、解理から解理へと向うにつれて認められる。産状運動の小さな場合から大きな場合の形式をとる。

(2) 一つの解理形式から他の解理形式への成長は、隣りて石英は迎撃を行って並列を進行する。

* fabric diagram が深部に対して尖対稱を示していることからしても常識的なものとみとめられる。

(3) 石英片巻のみとみとめられる *foliation* は固結時に化学的作用による成分の分化に基づいて生成したもので、結晶の消滅と迎撃とから *gefüge* 解析によつて証明される現象は岩石生成の全過程の中で極めて前期の或小規模のものである。*foliation* 生成に対しては、僅にそれと対応している程度のものである。

(4) 従つて *gefüge* 解析は岩石生成の最末期の或小規模の現象を解析しているに過ぎない。故に石英片巻の *gefüge* 解析の結果の取扱いはつづいて

にこれと同様の場合は於いて認められ、一般に*

では興奮な態度が必要である。

『関西文部例会』況

第 20 回 2 月 28 日 (土)

Diluvium と Pleistocene

池田 辰生

岩石鉱物の重碳酸塩の研究 田久保 実太郎

鶴岡 保郎 柿谷 浩

ハロゲンイオンに於けるイオンの交換

上田 健夫

第 21 回 2 月 25 日 (土) (出席者 33 名)

議題 3 兵庫分會設立の件 (会費 未 収)

近畿連合地学会の件

京都市河守附近の中古生代 大 次 圭 二

岡田 節夫

岩石磁性の地質学への応用 (その 2)

川 井 直 人、赤 中 洋 之 助

最近発見された奥丹の稀有元素鉱物

田久保 実太郎

第 22 回 3 月 25 日 (出席者 21 名)

議題 4 文部省委員の件

近畿連合地学会の件

連合地学会と地質学会との連絡を密にする事が
確認された。

第 23 回 4 月 22 日

(出席者 25 名)

日本地質学会總會及び年次学術大会の状況が政
府委員より報告された。尚總會に於て次の如
き平和に対する声明が 1、2 名の方員を除き出席者
の殆どを全部賛成して決議された。

平和のための科学をまもる 決議

第二次世界戦後、原子爆弾の出現する全

世界の深刻な反響として、次のようなことが言われ

「原子エネルギーは 果たたが、破壊のため、

使はれることはないであろう。人類の破壊をもち

うる科学のこのやうな逆用を防ぐものは人間の良

識である」と。

原子爆弾の被害を世界で最初経験した日本人

は、このことは深信することによつて、その悲痛

を体験が立派平和の貴重な礎石になつたことと

わづかれば心のなぐさめを與じていたのである。

しかるに、その向ひまだ数年もたたない今日、全

世界は、再びより強大な原子エネルギーによる恐

ろの可能地獄の扉は、飛躍せざるまゝの状態でた

ちのたつたのである。

科学の進歩が戦争技術の上り廻期的な変化をもち

らし、その惨害をますます深刻なものにしてこと

は事實である。しかし、科学そのものの発生と発

展は、はたして、このやうな人間社会の惨劇のため

のものであつたであらうか。否、科学こそは、

人類が、より平和に、よりゆたかに、より幸福に

生きるための探求の体系化の外ならないのである。

それならば、このやうな発生と発展の歴史をもつ

科学が、何故に人類の破壊をさし示す方向之に使

用しようとするものであろうか。そして、人類は、

何故にこれを阻止して、本来の方向をもとすこと

が出来ないのであろうか。

「人間の良識がこれを阻止するであろう」とやう

及びが語られたい。けれども科学者も、多く

の人々と共に、安堵の感をもていたのである。

しかしながら人間の良識と云ふことが語られると

き、この人間と言ふことばは、決して自分以外の

ものにもつたものではないといふことを強く及

者しなげればならぬのである。あの戦争の